
卒業生寄稿

教員を目指す後輩のみなさんへ

山 本 雄 大

綾瀬市立北の台中学校

1. はじめに

私は、臨時的任用職員を1年間経験した後に神奈川県教員採用試験に合格し、綾瀬市に勤務することになりました。中学生の時、教職に就くことを考え、大学の卒業まで考えを変えずにいました。しかし、理科に携わる仕事に就くことも視野に入れながら進路選択をしていたので、教育学部で勉強するのではなく、理科の教員免許を取得でき、化学の勉強もできる北里大学に通うことに決めました。

さて、私がここに書かせていただく内容についてですが、教員になってから役に立つことや教材などについての内容の方がよいかもしれませんが、教材研究のためのデータや経験がまだ足りないように感じているところがありますので、私の経験や体験をもとに教員を目指すにあたっての心構えや大切なこと、今教員に求められていること、研修や職場で学んだことなどについてお伝えします。

2. 「教師」とは

皆さんは、教師や教員という職業をどのように考えているでしょうか。世間的な考え方としては、世の中のことの特定の部分を教科という形で分け、知識として教えることを生業とするという考え方が多いように感じます。実際の教員の立場からすると、世間の人には理解してもらえないことが数多くある職業だと感じています。実際、教師や教員というものの苦労を私自身が考えていなかったくらいです。

私が、教師や教員について深く考えるようになったのは大学入学からです。その前の時期には、まだ目標として考えていただけでした。教員として、役立つ能力や知識はどのようなものであるのか、どんな部分を磨いていけばよいのかということを考えたのがきっかけでした。教師とは、どのようにあるべきなのか、どのような振舞いをするものなのだろうかなど、考えれば考えるほど疑問は尽きることなく生じ続けました。このようなことは、教職に就いた現在も絶えず考えながら過ごしています。

しかし、教師とは、教師という立場を持つ以前に一人の人間として存在しています。いふならば、教師とは「人」です。これから教職に就こうと考えている方に一言お伝えしておきたいのは、「教師なのだから」「教師として」ということから始まるのではなく、一人の人間として、子どもたちにどうなってほしいかを考え、教師としてどう伝えればよいのかを考えることが大事だということです。

私が現在考えている教師とは、①一人の大人としてどんな人間になってほしいのかを考える人、②教師という立場の影響力を考慮して子どものもつ生きていくための能力を伸ばすことができる人、③信念を持って子どもと向き合い折れない人、④子どものことを考えながら自分の能力を伸ばそうと努力し続ける人、これら4つの要素を少なからず持っている人です。

私の「教師」についての見解は前述したとおりですが、これは答えではありません。これから教員になる皆さんが、自分なりの答えを常に模索し、試行錯誤や自己研鑽をしていくことで、子どもたちにより良い教育が施せると思います。

3. 「教師」という職業のやりがい

教師という職業は、非常に大変な仕事です。体力的にも精神的にも時間的にも非常に負担の大きな職業です。基本的に平日は、休むことがありません。休みが取れないということではありません。しかし、担任となると易々と休めないのが現状です。何故かという、日々の生活指導は担任だけでなく、全職員で行いますし、生徒や保護者によっては、「～先生に相談があるんです。」と他の職員には相談しない場合などもあるためです。また、日々の授業は基本的に毎日必ず3～4時間は入っていますので、他の職業同様に休むわけにはいきません。人に接する職業でもあるので、周囲に気を配りながら仕事を行うので精神的な疲労も大きいです。さらに、中学校の教師は部活動の指導もあります。自身の経験の有無に関わらず任せられることもあるため、多くの負担がかかります。その他にも、実際に教職に就いてみるとわかる様々な苦労が見えてきますので、やる気とエネルギーに満ち溢れている方は、ぜひ一緒にお仕事ができたらと思います。

一方で、これらの大変さがやりがいでもあるのが教師です。毎日の授業の中でみられる子どもの疑問や発想がとても新鮮で、自分の考えをより深めてくれることがあります。これは、やりがいであり、仕事の楽しみの一つです。思考することを私自身が楽しんでいしますので子どもとともに考えるのは非常に楽しいものです。他にも、子どもたちは日々変化しますので、その変化を目の当たりにしたり、子どもの成長に関われることや一緒に成長できること、うれしさや悲しさ、感動を子どもたちと共有でき、時には与えることもできるということが私はやりがいだと考えています。これらは、教師という仕事の全体を通して感じるやりがいだと思っています。

教科指導におけるやりがいは、子どもから良い反応が出る瞬間や興味を持たせることが

できることです。教科指導における仕事の中に教材研究や教材開発などがあります。自分らしさや自分なりの発想を入れることができ、ある程度自由の利く部分なので、研究することや探究することが好きな人には非常に大きなやりがいになるのではないのでしょうか。私自身は、教職に就いたばかりの時、「教師って、研究職じゃないか。こんな仕事だったか？」と後悔にも似た気持ちをもったことがありました。しかし、仕事をつづけて慣れていく中で、教科指導の研究や探究が非常に面白く感じるようになったものです。きっかけは、「先生の授業は楽しい。」「おもしろかった。」という子どもたちの書いた一言でした。プリントのフリースペースに書かれた些細な一言が、私のやりがいを増やしてくれたのです。このときから、自分の授業を楽しみ、面白いと感じてくれる子どもがいるならもっと良い授業や教材を作っていこうと考えました。私の一番のやりがいは、子どもたちからの無意識の褒め言葉をもらえることです。「理科は苦手だけど、先生の授業は楽しい。」「理科は嫌い。先生の授業や話は好き。」「先生の授業は面白いから眠くならない。」など現場でしか味わえない嬉しさや楽しさ、面白さが様々なところに隠れていることは教師という職業の魅力のように感じます。

4. これから「教師」になる皆さんへ

これから教師になる後輩の皆さんへ、私の経験を通して感じたことをお伝えします。今、教師にとっても必要とされているのは体力や精神力はもちろんなのですが、そのほかに対応力や適応力です。教師は、生活環境、子ども、保護者、対教職員、仕事、プライベートと様々なことに対応、適応しなくてはなりません。やってみなければわからないことが多いと思いますが、常に思考し、広い視野をもつことが重要です。学生の時に行うアルバイトの経験は、教育現場のどんな場面で使えるだろうか、子どもと対峙した時にどのように活かせるだろうかなど学生のうちから考えておくともよいかもしれません。大学での授業はどのように活用できるか、大学で得た知識は中学生や高校生が学ぶ知識のどの部分と関わりが深いのか、中高生の時期に学ぶ知識が大学で学ぶことや世間での研究のどんな所に利用されているのかなどをリサーチして知っておくと、子どもたちの興味を湧き立たせる良い授業を計画する手立てとなるのではないのでしょうか。教職に就くまでの経験をどのような形で、教育に結び付けることができるか、活用できるかという活用力も必要とされているように感じます。教師になるまでの時間を有効活用し、自分磨きをするよう心がけ、少しずつでも実行していけるとよいでしょう。

私は、どんな子どもを育て、大人にしていくのかを考え、実行していくのが教師であると考えています。これから、教師になるのであれば、授業や指導の場面で考えるべきは「子ども」を主語にして考えることです。授業は、生徒（子ども）が学ぶのであって、教師が学ばせるものではありません。子どもたちに、望ましい人間像を教え矯正していくのではなく、子どもたちが望ましい人間像に近づいていくように指導するものだと思っています。

す。教師は、子どもにとって身近な大人の一種です。子どもは、大人の真似をして育っていきます。教師は、教師である前に一人の大人であり人間です。社会的にみても子どもを導く存在でなければならないと思います。子どもたちに目指させる人間像があるならば、それは教師が目指すべき人間像でもあるわけです。学び方や考え方、姿勢や態度は子どもたちが真似をします。良き手本となるように自己研鑽をする姿を示すことができれば子どもたちは自然に成長するでしょう。学生を終え、「教師」になる前に一度自分自身の振り返りを行っておくとよいと思います。自身の改善すべき点はどこなのか、どんな大人になりたいか、どんな姿を見せるのかなど考え出すときりがありません。良い仲間が増えることを私は期待しています。

加えて、教師になるにあたって趣味を見つけておくことをお勧めします。なぜならば、趣味の話から色々なことに結び付くからです。教員間や子どもとの話題にしてコミュニケーションをとるきっかけにしたり、趣味を通して学んだことや得たものを授業に活かしたり、趣味をもつことの良さを伝えたりすることができます。子どもは、知らないことや知らない世界が存在することを認識できないでいることが多いようです。自分たちが生きる世界が、楽しいことに満ちている、こんなに明るい未来があるのだと知らせてあげるためにも趣味を持っておくとよいでしょう。また、気分転換やストレス解消など健康維持のためにも重要です。教師という職業は、自分の心と体が資本ですから最良の状態を保つことは自分のためだけでなく、多くの人のためにもなりますので、学生のうちから趣味や楽しめること、打ち込めることを見つけておけるとよいでしょう。趣味でも授業でも、職員室の中でも生き活きとしている大人の姿を見せることは、教育効果を高める事にもつながるので元気よく生活する計画をしておくことも大事でしょう。

現場で働くにあたって、教師は教えることもあれば教わることもあります。常に謙虚な気持ちで子どもにも同僚にも接することが大切です。私自身の経験からですが、つらいときにその気持ちや様子を感じ取った子どもがかけてくれる優しい言葉や何気ない心遣いで救われるときがあります。子どもから色々なことを学ぶことがあります。教えるだけでなく、教わることも仕事だと感じています。これから教師になる皆さんにも同じような経験をしてほしいと思います。そして、多くのことを伝え、多くのことを吸収してもらえたらと思います。

最後に、経験の浅い私にこのような貴重な機会をいただきましたことを心より感謝いたします。また、北里大学でご教授くださいました理学部の先生方、教職課程の先生方、本当にありがとうございました。